

手紙

木村晴美さんへ

『現代思想』の特集号「ろう文化」を手に入れました（96. 4臨時増刊 青土社）。一冊の雑誌に取り上げられ、色々な人が文を寄せて、大きな焦点になっていく中で、木村さんたちの活動が、ひとつの大きなうねりを形成していくのではないかと、今後の活動に改めて大きな期待を抱いています。

まだ、ちょっと読みかけているだけですが、木村さんと長谷川さんの対談を読み、その対談を読んだ感想をどうしても伝えたくて手紙を書いている次第です。以前にもお手紙しましたが、聴覚障害者の固有の問題に、どこまで、他の障害者がコメントしえるのかという自問しつつの提起です。そもそも、「ろう者は障害者ではない」という木村さんの提起は重々承知で、そのことの反論がこの文章を書こうとするきっかけであることとして、最後まで読んでいただけたらと願っています。

対談の内容としては、大かた木村さんの話の方に共鳴することが多かったのですが、何か、すっきりしないやりきれなさを感じています。言葉の定義からはじめようという試みは、議論をかみあわせようとする方法として、的確であったと思うのですが、内容的に議論があまりかみあっていないように感じました。例えば、ろう者という言葉ですが、木村さんは、大文字のデフと言う意味で使われているのに、長谷川さんは、小文字のデフで使われている。これに関しては、小文字のデフという意味では、ろう者という言葉を使わないということではなく、使い分けで、大文字、小文字ということで表現することでやっていけるし、小文字のデフを書き言葉の場合には括弧付で、「ろう者」（ろう者として規定される者）、大文字のデフの場合はただ ろう者 と書くというような使い方もあるのではないかと思います。（※）（尤も、このような提起には、書き言葉自体が音声言語から規定されているの、批判があるかもしれませんが、ここではあくまでも内容的な提起です。）

※ そもそも、ろう者（ここでは、私の規定で厳密に書けば「ろう者」）という規定自体が、社会的な規定で、むしろ聴者の側から区別されるものとして出された規定ではないでしょうか？それをろう者の側から規定し直す、という意味はあります。しかし、聴者の側から規定される者という意味でどのような言葉を使うのか、という問題があります。これがそもそも差別の根源的な内容で、差別を語る時には、この表現を言葉化せねばなりません。このことは、障害者という言葉においても同じです。私は「障害者」を障害者と規定される者－障害者差別を受ける者という規定をし、障害者という言葉は障害者運動主体というような使い方をしようと提起しています。（「障害者反差別序説」第1章第1節参照）

さて、もう一つ、疑問に感じたことを書き記します。木村さんの「同化型の差別」という規定ですが、この言葉ではこぼれ落ちることがあるのではと感じています。長谷川さんとの対談で、長谷川さんが「歩み寄る」というような主張をされていることへの反論の内容にも関することです。私は差別を大きく二つに分けています。一つは排除型の差別、内

容としては、抹殺・隔離・排除。もう一つが抑圧型の差別、内容としては、融和・同化です。この融和ということが、「歩み寄る」論の内容になっています。被差別者に何か非があるわけではありません。百歩・千歩譲って、何か非があるとしても、それは差別の関係性の中でつくられたことで、そもそも差別の構造自体を不問にして、非を責められるゆわれはありません。差別者と被差別者の間で、「歩み寄る」ということは、被差別者が差別に甘んじる、という意味しかありません。「歩み寄る」のは対等な関係を作れ出せた時です。昨今、「共生」ということが語られていますが、差別的な関係性をそのままにしての「共生」ということは、抑圧という型の差別以外のなにものでもありません。「共生」は、一つの差別事項で差別者の立場にある者が別の差別事項では被差別の側にいる、そこでの差別者としての自らの克服と被差別者として自らにかけられる差別と闘っていく、そこで反差別の連帯を図って行く、あくまでも反差別ということの中での共生、言わば「反差別共生」だと押さえています。

最近、この「歩み寄る」論なり、「自己責任」ということがあちこちで語られています。アフリカン・アメリカンの大規模な集会でも、この「自己責任」ということが突き出されていきました。障害者運動は「愛される障害者」運動」として始まりました。他の被差別者の運動でも、「自己責任」に通じることが語られています。部落解放運動においても繰り返し、自己責任ということが語られていました。誤解のないように書いておきますが、自己責任や自己変革ということを一般に否定しているわけではありません。差別がある現実で、自己責任ということを語ることは、差別があるということ自体をあいまいにしまうと指摘しているのです。自己責任や自己変革は、差別と闘うという中で、運動の中で、果たして行くこととしてあると押さえています。

そのようなこととして、繰り返し起きてくる「歩み寄る論」の批判のためにも、差別の形態論の整理をしておく必要があると思っています。

さて、最後の問題ですが、いわゆるDプロの排外主義の問題について、あえてコメントさせていただきます。Dプロが手話の問題から入っていった、ということは、民族問題規定と通じることで、民族問題と類比できる性格において、言語の問題から入ったということとして当然のことだと理解しています。ただ、その過程の論争で、中途失聴者・難聴者に対する排撃のようなことが、理解できません。中途失聴者・難聴者を今回の対談の中でも、木村さんは「時には抑圧者としてたちあられる」というようなとらえかたをしているのですが、そのこと自体は正しい指摘だと思います。しかし、「抑圧者としてたちあられる」のは、差別への屈服という中において起きてくるのだというとらえ返しが落ちているのではないのでしょうか!?先程の差別形態論を援用すれば、ろう者が排除型の差別を受ける事が多く、中途失聴者・難聴者は抑圧型の差別を受けることが多い。そして、抑圧型の差別が差別としてとらえられない中で、その差別に屈服する傾向が強い。そういう中で、排除型の差別をより多く受ける人たちへの抑圧者としてたちあられるという構造を押さえてお

く必要があるのではないのでしょうか!?このことは、障害者運動の新しい流れが形成される時、親との関係において端的にあらわれました。親が直接的に障害者の抑圧者としてあらわれることを、敵としてとらえる傾向が多く生じました。実際、そのような緊張関係の中で、衝突せざるを得ないという側面はあったにせよ、親自身が障害児とともに「社会」から抑圧される中で、子供への抑圧者としてたちあらわれる構造を押さえる必要があります。これは、他の差別の問題についても、同じような構造があります。キャリアをもった女性自身が、「あなたたちが、甘えた考えをもっているから、女性全体が差別されるのよ!」という論理で、女性への抑圧者としてたちあらわれるという構造が指摘されています。そのような差別の構造の中で、聴障者への差別が現存する中で、聴障者が聴者の文化を選択した時、そこに差別自体も受容するという構造が生まれるのではないかと思います。

さて、多分このあたりは以前にお手紙した時に勧めた南アフリカの「カラード」(アフリカンとヨーロッパ系との間で生まれた人々)を巡るH. D. クラークの『差別社会の前衛』(新泉社)における「マージナルマン」(※)の研究を読んでもらえれば、中途失聴者・難聴者の陥っている状況が(それは私たち吃音者にも通じるのですが)、とらえられるのではないかと思います。

※ マージナルマンという言葉が女性差別的な言葉で、マージナルパーソンなりマージナルピープルという言葉に置き換えられるべきという指摘と共に、その訳語である境界人という意味では、そもそも一つの被差別事項において、中間的存在などないという意味では、マージナルパーソンの概念自体も間違っていると理解しています。これはあくまで、心理的マージナリティと差別形態論の問題だととらえ返しています。

このように論を進めていくと、問題は、「差別への屈服」ということのとらえ返しですが、私も吃音者の中で、「どもりは治るもの、治すべきもの」という主張に反撃を続け、繰り返し出てくる「治す」という動きに対して批判してきたのですが、しかし、そもそもなぜ治そうとする動きが出てくるのかを押さえる時、単に啓蒙的なところで主張しても仕方がないと押さえています。ろう者の場合は、手話という文化の核があるので、またちょっとニュアンスが違ってきますが、基本的に同じ構造にあるのではないかと思います。

口話の流れや日本手話から口話に引き寄せられたピジン言語(混合言語)が生まれてくるのは、そこに、差別があるからです。排除型の差別から逃れようとして、抑圧型の差別にとらわれているという構造です。

木村さんたちが手話という言語の問題から出発されているそのことは当然なのでしょうが、文化ということだけにとどまり、そこで啓蒙運動を展開されようとしても、現実の差別は文化の相互承認がないということだけではないのですから、一人一人が抱えている問題に対処できなくなり、反発も起きて来ます。文化という面だけでとらえると、いかなる文化を選択していくのか?という意志の問題にとらえてしまうのですが、そのようなオルタナティブ(選択性のある)こととして、現実があるわけではありません。そこに差別の

問題があることをとらえそこなってしまうのではないのでしょうか!?端的に言うと、労働の問題では、現実には口話ができる方が就職に有利という現実があります（吃音者は吃音が軽い方が就職に有利です）。これが、口話に引き寄せられる最大の理由です。そのあたりからも風穴をあけていかないと、ろう文化運動は文化運動にとどまってしまうと行き詰まってしまうのではないのでしょうか?!もう一つあえて、書き加えておきますが、差別をはねかえせていない現実で、差別と闘う強力な運動をつくりえていない中で、差別に屈服している人達を責めるのは、運動を進める者としての主体性を放棄しているとしかとらえられません。また、何が主要矛盾で、何に対して主要に闘っていくのかということをとらえ損なっているとしか思えません。差別ということをとらえ返していくと、中途失聴者・難聴者は、抑圧者としてたちあられることに対しては批判しつつ、反差別ということで共に闘っていくことを提起していく、連帯を求めて行く対象者ではないのでしょうか!?

ろう文化に魅力を感じ引き寄せられているのですが、どこまで理解しているか自信がありません。私は、かねてから「文化が語れないおもしろみのない者」として通っています。それで、民族問題に関して在日朝鮮人というマージナルなところから書いている徐 京植（ソ キョンシク）さんの文をちょっと長くなりますが、最後に引用しておきます。ちょうど、今回の論点に適切な提起になるのではと思っています。（※）

※ 文の内容に全面的に賛同しえるわけではありません。例えば、文中のスターリンの民族規定については、そもそも誤っていると思います。ユダヤ民族の存在を考えるとそのことは明らかです。どれか一つでも欠けるとということではなくて、むしろどれか一つで民族を形成する場合もあると押さえ得ます。また、「堅固な」ということにも、異存があります。差別社会においては「堅固な」とは言えるだけです。民族規定、まだ整理できていませんが、私の前出の文（「ろう者の問題＝民族問題??」）を参照下さい。他にも、いくつか指摘しておきたいことがあります。ここで、論点になっていることに、多くの吸収すべき内容をもった文として引用しておきます。

「民族とは、言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちにあらわれる心理状態、の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された、人々の堅固な共同体である」という有名なスターリンの定義（『マルクス主義と民族問題』）を最初に知ったのは高校生のときだった。その時、私の心のうちに生じた葛藤はいま振り返ってもなかなか興味深い。

私にはこの定義は、文句なく支持すべき普遍的な正義のあかしに思われた。なぜなら、朝鮮民族はこのような資格条件を満たしていたにもかかわらず、日本の植民地支配によって一間接的には欧米先進国によっても一「民族」として存在することを否定されてきたのだから。そして、その結果、私は日本に生まれ落ち、本来属していたはずの共同体から引き剥がされたのだから。

しかし同時に、私はこうも思ったのである。残念ながら私の母語は日本語である。住んでいる地域は日本であり、経済生活といえば日本の国民経済の網の目にがっしりと組み込

まれている。それに、そもそも「文化の共通性のうちにあらわれる心理状態の共通性」とはいったい何なのか？ 自分自身について考えるならば、私はすべての資格条件において欠格者なのだった。

その上スターリンは「これらの特徴の一つでも欠けるならば、それだけで、民族は民族でなくなってしまう」とも述べている。つまり、私は自民族の「民族」としての資格を主張すればするほど、自分自身はその「民族」の枠からこぼれ落ちてしまうという引き裂きを味わうことになったのである。

この引き裂きの秘密は、「資格」という考え方にある。ある人々の共同体が「民族」であるための資格。ある個人が「民族」のメンバーであるための資格。—こうした考え方は、＜文化＞を資格条件の必須項目に数え上げるのだ。だが、＜文化＞によって「民族」を認定することと、＜文化＞からの断絶（すなわち「欠格」）をもって個人の民族的所属を否認することは、実は同じひとつの固定観念に発している。両者はともに＜文化＞を静態的かつア・プリオリなものと捉えるステレオタイプなのである。

考えてみれば、帝国主義と植民地支配が無数の人々を＜文化＞から引き剥がした今日、こうした引き裂きの経験は在日朝鮮人だけのものではない。「先進資本主義国」—多くの場合、かつての宗主国—に生きる「第三世界人」に共通するものであろう。これらの人々は、普通いわれるように他者の＜文化＞との差異の故にではなく、むしろ、このような引き剥がしと「欠格」の痛みに故にこそ、ア・プリオリなく＜文化＞に充填された「国民」や「市民」の群の中に自己を解消してしまうことなく、「われわれ」であり続けるのである。

いま求められていることは、これら＜文化＞から引き剥がされた者たち自身の、動的で創造的な文化観を鍛えることであろう。こう述べるとき私が想起しているのは、スターリンの定義を知ったのと同じ高校生の頃に読んだ、フランツ・ファノンの言葉である。

「しかし原住民知識人は早晚理解するだろう—人は文化を出発点として民族を証明するのではなく、占領軍に抗して民衆の行なう闘いのなかで文化を表明するのだ、ということ」を」（「地に呪われた者」）。

全地球が単一の市場圏に編入された今日、きわめて隠蔽された抑圧や収奪との、「占領軍」だけでなく多国籍企業や巨大メディアを向こうにまわした闘いが複雑かつ困難であることは言うまでもない。だが、ある人々がその民族的所属の故に差別され抑圧されている現実があり、どんな形態であれそれへの抵抗がある以上、たとえ彼らが＜文化＞なき「欠格者」であろうと、そこにこそ文化は表明されるのである。

「文化ということ」（『思想 1996.1』岩波書店）

引用文の「本来」という概念批判

主要矛盾の問題における、コミンテルンの社民主要打撃論への批判